

やくも
八雲たつ 秋の森山 果を保ち
くりみ べにはながたみ
採りし栗実に 紅花筐

令和七年九月九日

大中臣正比呂



竹べらで毬栗いぐりを剥いて籠かごに詰めて家に帰る道で、黄変しつつあった紅葉もみじの一枝を手折たおって入れた。そんな情景が浮かぶ古代の出雲の地は穏やかであつたろう。

この地は自然の恵みも豊で「森山」の姓が多い。同家紋の彼女とは、古代でも出会ったのかもしれない。そんな直感ちかんは諸兄にもあることだろう。

古代出雲の地には、時折り朝鮮半島から渡来人とらいじんが交易に来る港があつた。伽耶かやからは北上する対馬海流つしまに乗って鉄の文化が渡って来る。

それが奥出雲に「たたら製鉄」が伝わったのであろう。